

2021

8

令和3年8月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻336号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とまろお



さわやか福祉財団

思恩忌 夏を 執り行いました



これまで当財団の理念と活動に共感いただき、遺贈ご寄付をお寄せくださった皆様、また、財団の活動を支えてくださった方々を偲び、7月14～16日に**思恩忌 夏**を執り行いました。

思恩忌は毎年、東京のお盆であるこの時期に行ってきました。今年も、3月のブロック全国協働戦略会議の場で「思恩忌 春」を行い、今回は「思恩忌 夏」として財団事務所前に祭壇を設え、会長、理事長、職員一同で、故人の皆様のご冥福をお祈りしました。

ご遺志にしっかりと報いるよう、今後も財団全員が一丸となって、地域共生社会づくりに向けて活動を進めてまいります。

とあ言おう

2021年8月号

CONTENTS

2 **新しいふれあい社会 実現への道**

地域で考える心のレガシーとは 清水 肇子

4 **さわやか福祉財団の軌跡 真っ直ぐに、30年**

寄稿5 企業時代の経験と人脈を生かす

新たな活躍の場できいき!

さわやか福祉財団 編集部・大岡 朋子

14 **連載** 今風女子89歳

良いことも、つらいこともあってこそ人生

滝野 文恵さん

20 **広げよう つなげよう 地域助け合い** 活動の現場から

住民自治から助け合い活動へ

高齢化した一戸建て団地の取り組み

西楽田ささえ愛の会 (愛知県犬山市)

28 **「地域助け合い基金」 助成先のご紹介 / 状況のご報告**

34 **連載** 7 老いの暮らしを創る

早めの引っ越し④ 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・

助け合いの地域づくり

38 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

44 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー (賛助会員)・ご寄付者の皆様のご紹介

46 NEWS & にゅーす

47 さわやか活動日記 (抄)

⑬『助け合い大全 '19』のご紹介 / ⑭「NEXT」動画のご紹介 / ⑮「基金」ご寄付のご案内

⑯『さあ、やろう』のご紹介 / ⑰『さあ、言おう』バックナンバーのご紹介 / ⑱みんなの広場

/ 投稿募集 / ⑲役立っています! 皆様のご寄付 / ⑳さわやかパートナー・『さあ、言おう』

のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう! 新・ひとりごと・大森 彌

地域で考える心のレガシーとは

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

「レガシー」という言葉は、今では当たり前のように目にするようになった。通常は「遺産」と訳されているが、どうも記事などを読む度にこの和訳が今ひとつしっくりとこない。

当財団では、ワークショップなどで、「目指す地域像」が大切とお伝えしているが、どんな未来にしたいか、そこに向けて何があつて何が足りないかを考えていこうというもの、ある種通じるものがある。なかなかひと言で表現しづらいレガシーというこの言葉の意味を、地域づくり・共生社会づくりの観点から少し考えてみたい。

コロナの感染拡大が止まらず、賛否両論ある中で東京オリンピックが開幕した。本誌が皆さんのお手許に届くころには、閉幕を迎え、余程の緊急事態でなければ、次の東京パラリンピックに向けた準備があわただしくすすめられていることだろう。

今回の東京2020大会では、違いを認め合う多様性と調和の重要性がうたわれ、共生社会をはぐくむ契機となる大会を目指すとしている。まさにこれをレガシーにしたいとの報道がよく見られる。ここでいうレガシーとは、未来につながる理念であり、開催によって生まれる成果であり、そこに向かう人の行動自体を指すものだ。

特に障がいを持つトップアスリートの祭典である東京パラリンピックは、「互いに認め合い、助け合う共生社会を目指すことを世界に伝える」場そのものだ。開催によって多様性や共生の理解が大きくすすむことが期待されるし、その意味で、大会が開催される意味はとても大きい。とはいえ、一方で、「負のレガシー」という言い方でも取り上げられる。否定的な要素が残されてしまうという意味で、たとえば大会を開催することで、コロナ感染が爆発的に広がってしまったっては大変なことだし、巨額を投下した豪華な建物がその後お荷物になってしまった、というのも過去目にしたケースだ。また、残念ながら今回の東京オリンピックでは、従来の大会にも増して誹謗中傷する言動が多いと感じる。SNSの普及とその匿名性が大きな要因の一つだろうが、そもそも世界各国で排他的ナショナリズムが広がりつつある。多様性や共生とは真逆の負のレガシーを生み出してしまったといった汚点は絶対に避けなければならない。

レガシーとは、細かくいえば、「肯定的なもの・否定的なもの」「有形・無形」「事前に計画したもの・偶発的なもの」の3つの軸があるとされている。これまで日本では、建造物や商品など目に見える「物」のイメージが強かったが、21世紀の今、ようやく心・無償財としてのレガシーの幅広い概念が浸透し始めたといえるだろう。

地域づくりにおけるレガシーとは、将来に向けて残していきたい地域の大切なものであり、そこにはハードだけでなく、住民みなでやっという意識の変化や、そうして皆で集まって計画して生まれた成果、そうした交流を広げようというその過程そのものも含まれる。

様々な課題と困難に見舞われたオリンピック・パラリンピックを経たからこそ、人と人とのつながり合いが何よりも大切だというレガシーを皆で伝えていきたい。

真っ直ぐに、30年

寄稿5

企業時代の経験と人脈を生かす

新たな活躍の場でいきいき！

さわやか福祉財団 編集部・大岡 朋子

今秋30周年を迎えるさわやか福祉財団の軌跡を、人を中心にしながらご紹介するシリーズの第5回です。シアの社会参加が注目されていますが、当財団では創立当初から多くの皆さんにボランティア参加してもらっています。そんな当時を振り返ってみます。

企業OBの市民団体での心構えとは？

「ここはいわゆる会社とは違う市民団体ですので、自分のことは自分で。机の掃除当番なども

できますか？」

1992年。所員はまだ5名ほど。狭い事務所、五十嵐純事務局長（当時）が受話器に向かって何やら答えている。電話を切り終わった



あと、「やっぱり一発だね」と、こちらを向いてニコッと笑った。

当時、「ロッキード検事が福祉の道へ転身」と堀田力現会長のことがよく報道されており、全国から本当に多くのありがたいご支援のお申し出をいただいた。定年前後の男性からの反響も多く、自分も働きたいという連絡も時折届いた。こちらは一介の市民団体で、経験や実績に見合う給料は支払えないからだいたい立ち消えになるが、それでも構わないとおっしゃってくれる人も中にはいる。本当にありがたいことなのだが、実はそれだけでもだめで、それが冒頭の会話につながる。

企業を定年退職した男性が市民活動団体に参加する場合、仕事であれボランティアであれ、企業時代の上下関係の意識のままではまったくうまくいかない。面談してみると明らかに合わないとわかる人も多かった。そんな悩みを聞きながら、「机の掃除当番もあります、とでも言ってみては？」と、話していたことを試したよ

うだった。

ちなみに、当時も今も、財団に机の掃除当番などはなく自分のことは自分でやるのが基本だが、何かあれば、皆で率先して掃除もすれば引越しの片付けもする。これはいわばリトマス試験紙で、企業時代に慣れた上下関係から脱却できるかどうかを試す問いだ。冒頭の主は最初から難しいと判断した上での、電話でのさりげないお断りの言葉だったのだろう。

団体を立ち上げてまだ1年にも満たない頃。小さな小さな組織だったが、大きな夢を持っているからこそ、キャリアや経験はもとより、何よりも新しい挑戦に向けて「一緒にやりたい」という気概を持った仲間を私たちは求めていた。

**集まってきてくれた人たちは
皆ふれあい社会に共感があればこそ**

「お金はないけれど活動を広げるために良い人材はどんどん欲しい」。そんな欲張りな思いが、

しかし何と現実には叶った。企業時代の「心の背広」を脱ぎ捨てて、新しいふれあい社会づくりと一緒に進めたいという情熱を持って、ボランティアで関わってくれた皆さんが、一人、また一人と飛び込んでくれたのだ。今に至るまで同様で、当財団の事業運営には企業OBボランティアの皆さんの多大な貢献が欠かせない。

全ての方々の思いや取り組みを紹介するのは残念ながら誌面に限りがあり難いため、本稿では、1991年の財団創立から10年程までの時期に主に焦点を当てて、どんな役割を担ってくれたのかをご紹介しますみよう。

* * *

創立以来の主要事業の一つとして進めてきている働く人やシニアの社会参加の推進。その当初から中心となって多大な貢献をしてくれたお一人が和久井良一さんだ。

和久井さんは現役時代に堀田会長の講演を聴き、理念に賛同して94年に財団に参加。財団法人化への基金集めをはじめ、企業や自治体への

ボランティア活動普及の働きかけを担当してくれた。特筆すべきはその行動力。面識のない全国の子事・首長にも果敢にアポを入れて財団の理念や助け合いの大切さを説いて回り、そこで得た自治体の考え方や動きを職員にレポートしてくれた。

また、シニアの社会参加を働きかけるネットワーク「高齢社会NGO連携協議会」（高連協現共同代表・樋口恵子氏、堀田力）立ち上げと事業推進にも奔走。当財団では2000年の介護保険制度のスタート時に、同時に発足した成年後見制度の推進を働きかけていたが、特に市民後見人の普及を高連協と連携して強力に進めてきた。その担当が和久井さんであり、当財団の理事・渉外代表としても長く活躍していた。地元で「市民後見人の会」を仲間と共に立ち上げ、全国に取り組みが知られるNPO法人として活動を育成。89歳になる今も、地域づくりの動向に目を向け、地元でできる社会参加を実践中だ。



年に1回開催しているさわやか福祉財団の交流フォーラム。事業運営の活動報告から。
(写真左から、和久井良一さん、丹直秀さん、高野芳夫さん)

和久井さん
とほぼ同時期
の95年、所属
企業に働きか
け、社会貢献
の方策を進め
るために自ら
専任担当第1
号として当財
団に参加して
くれたのが、
故中村延夫さ
んだ。ボラン
ティア活動の
勉強を目的に
当初3か月の
出向という形
だったが、そ
の後も続いて
ボランティア

として参加。来団当初から会員勧誘をはじめ企
業や労働組合に働きかけて、まさに当財団の社
会参加推進事業の社会貢献活動モデルをつくり
上げてくれた。若い頃に病気を患い、人同士の
つながりをとても大切にしてきた中村さんなら
ではの活動ぶりだった。

このように出身企業から出向した後、定年後
はそのままボランティア職員として活躍という
形は、現在も社会参加推進事業を担当してくれ
ている6月号で紹介した蒲田尚史さんをはじめ
め、その後も何人もおられ、主に社会参加の分
野の事業を支えてくれている。

特技を生かして事業プログラムを立ち上げ

また、現役時代の人脈を生かすのと同時に、
特技も生かして活躍してくれる方々もいる。そ
の一人、吉田旭雄さんは、社会参加をより身
近にするために、スポーツによる心の交流事業
として「サッカーさわやか広場」をゼロから考

案。Ｊリーグの各クラブチームとも連携した活動として全国に広めてくれた。

当財団は、創立当初よりＪリーグから多大なご支援をいただいているが、実は吉田旭雄さんは、Ｊリーグ初代チェアマン川淵三郎さんの学生時代からの親しい友人。縁あって当財団に参加してくれ、地域貢献を旨とするＪリーグの応援を得ながら、地元の老人ホーム、少年少女サッカークラブとその保護者、そしてＪリーガーとの交流プログラムを綿密に作成して実行していった。当日は、自前でユニフォームをあつらえて、マイク片手に笑顔で進行役も行う。

核家族で育った子どもたちは最初は高齢者の方々との交流も恐る恐る。でも高齢者から感謝の言葉をかけられたり、涙を流して喜ばれたり、子どもたちにも自然とやさしい気持ちが含まれる。そこがこのプログラムの効果であり、その後、卓球、バスケット、剣道、新体操、柔道、バレーボールと種目が広がっていく。後年になるが、そんな幅広い展開を強力に推進して

くれたもうお一人が、長澤良彦さんだ。長澤さんも学生時代はスポーツマン。アイデアが豊富で、「新体操で多世代交流？」と、最初は職員皆で驚いたが、見事に種目毎の特色を生かしながら、楽しい、そして心に染みるプログラムを展開してくれた。

サッカーさわやか広場を始めた時から、その当日は、企業ＯＢの皆さんを含めた財団職員有志が手上げでボランティア参加して進行を手伝ってくれている。いわばさらなるボランティア活動ともいえるだろう。



「サッカーさわやか広場」活動の様子。
(写真中央・ユニフォーム姿の吉田旭雄さん)

企業OBボランティア集団で 寄付集めを担当

創立当初からやりたい活動は山ほどあり、取り組むためのお金が必要。運営は節約に努めながら各種の補助金や助成金を申請して取り組んできた。一貫して進めてきた住民主体の地域づくりは今でこそ考え方として一般的だが、30年前の当時はまだまだ理解が薄かった。そこで、使途や目的に制限が多い補助金や助成金だけに頼らず、住民活動の普及なのだからやはり市民の皆さんに応援してもらえるようにと、寄付の働きかけを強化することとした。

まさにそんな時に、金融機関と生命保険会社を定年退職されたお二人、故高野芳夫さんと丹直秀さんが財団にボランティアとして参加してくれた。96年のことだ。高野さん、丹さんが、財団の財政基盤を支える役回りを率先して担ってくれて財務グループが誕生した。寄付集めというのは断られることの多い大変ストレスも溜

まるであるう役割ながら、「ボランティアだからこそやって楽しいんだよ」と頼もしく応援してくれていた。

丹さんについては、本年1月号『さあ、言おう』の『厨房男子』で詳しくご紹介しているので詳細は省略するが、財務活動のほかに寄付文化の推進、助け合いのネットワークづくり、被災地支援といった事業部門でも現役時代を彷彿とさせる幅広い活躍で、現在も理事として地域支援事業の働きかけや地元神奈川での地域づくりに精力的に取り組んでいる。

高野さんは元銀行マン。その実績と人望で役員にと望む会社も多く引く手あまただったと聞くが、ご本人からはもちろんそんな素振りはいったくうかがえない。

「財団には貧乏神が住んでいるのか、お金がどんどん活動に消えていく。自分たちが頑張らな」といね」と、いたずらっぽく笑ったあと、真面目な表情で「財団や、社会に、少しでもお役に立ってると思えるしね」と、はにかんで答えて

くれたことがあった。

高野さんは、その後理事としても長く活躍してくださったが、会費や寄付呼びかけに加えて、さわやか福祉財団への遺贈の取り組みの基礎づくりに多大な貢献をしてくれた。

まず遺贈や相続に詳しい当時蒲田公証役場の清水勇男公証人に相談に乗ってもらいながら、公証人の人脈をたどって遺贈の社会的意義について理解を広め、パンフレットを作成して公証役場や信託銀行などの連携関係をつくった。弁護士・税理士等専門家とのネットワークを構築し、一方では、財団への問い合わせ対応も丁寧に一手に引き受けてくれた。

他の非営利組織では今も躊躇するところが多い不動産の遺贈受け入れも、高野さんの呼びかけで同じ銀行OBで不動産畑が長かった故古川寛さんを2000年にボランティアとして招き入れ、将来を見据えて受け入れ体制づくりを進めてくれた。

古川さんは、後年、「何ができるかと不安も

あったけれど、高野さんに力が必要だからと言われたら手伝うしかないからね」と笑っていたことが思い出される。一般に、ボランティアの最初のきっかけは知り合いから、というのはいく言われることだ。高野さんの見立てどおり、古川さんは豊富な知識と経験を生かして、後の複雑な不動産案件も実直に進めてくれた。

遺贈は、やはり経験や正しい知識が信頼の基になる。現担当者の森恒俊さんも銀行出身ボランティアだ。そして何よりもお伝えすべきは、こうした担当の方々が、遺贈者ご本人の思いを尊重しようという当たり前の姿勢を常に深く貫いてくれていること。担当者自身が社会貢献の思いを持って取り組んでいるからこそであり、当財団の誇りでもある。

**大きな仕掛けと地道な働きかけ
できることからやってみる**

当時、遺贈の働きかけで今につながる基礎を



全国からご支援者の皆様が集まる交流フォーラムでは、お揃いのジャケットを着て皆様をおもてなし。
(写真上・左から、苫米地正章さん、川井信行さん、津田武さん、古川寛さん)



(写真左から、中村延夫さん、大竹徳行さん)

構築してくれたお一人に、故大竹徳行さんもある。大竹さんも銀行OBで、高野さんと相談しながら、自身の人脈を活用して、信託銀行との協定締結を進めてくれた。

一方、高野さんは、こうした長期展望の働き

かけとは別に、すぐに活用できる身近な寄付にも取り組んでくれていた。財務グループには、その後、頼もしい企業OBの方々が次々とボランティア職員として参加してくれるようになっていた。毎週1回、そうしたメンバー皆で会議をし、課題を整理し、アイデアを出し合った。

その一つが、お店に財団への募金箱を置いてもらうというもの。このアイデアを考案して実施してくれたのが、97年から参加の川井信行さんだ。石油会社OBの川井さんは、行きつけの床屋さんから飲み屋さん、大学時代の仲間まで、気軽に寄付をお願いできる仕組みをつくって依頼。募金箱考案からお店への依頼、募金箱・募金の回収といった一連の活動を地道に継続してくれていた。

財務グループはそれぞれの状況により週2〜4日参加という場合が多い。そんな中、現役で会社役員として多忙を極めながらも、週1日、時には半日といった形で時間を割いて早い時期から長く寄付集めに尽力してくれたのが津田武

さんだ。時間は限られていても貢献できることをまさに実践で示し続けてくれた方だ。

また、商社OBの苦米地正章さんは、財務グループと共に、グループホーム普及や映画を活用したふれあい啓発など事業部門も積極的に担当してくれた。カメラ撮影も得意で、担当事業とは別に、財団のイベントがあると、土日ともいわず率先して撮影を担当し、活動の記録保存という形で大変貢献してくれている。

当財団のボランティア職員は、今も同様に、お昼にかかる活動をしたときに昼食代としての1000円と交通費実費のみの支払いとなっている。長く財務グループとして進めてきた活動は、2010年に新公益法人になると同時にプロジェクト制に組み替えた。寄付・賛助会員の働きかけ、遺贈の取り組み、寄付文化の普及など個別テーマ毎に3つのチームに分かれたが、連携しながら横断的に取り組んでくれている。

ユニークなところでは、現役時代に職場で堀田会長の講演に共鳴し、まず妻や娘に財団での

ボランティアを勧め、退職後に妻からの「ボランティア交替」の提案に同意して入団という人も。会員担当として長く関わってくれている藤本裕一郎さんだ。現在のメンバーは、他に天野敏男さん、飯久保寛幸さん、小松正さん。皆、会員担当や寄付の推進、出身企業との窓口役などとして活躍してくれている。先にご紹介した方も含めて全員企業OBというところも変わっていない。

* * *

まさに多士済々の企業OBボランティアの皆さん。ここにご紹介した以外にも本場に多くの方々が参加し、当財団の今に至る礎を築いてくれている。また何かの折にそうした皆さんをご紹介できればと思う。

次号では、初期の頃の運営部門を取り上げる予定だ。こちらでも企業OBボランティアの皆さんが活躍してくれている。日頃はあまり表に出ない運営スタッフの横顔と合わせて、どうぞご期待ください。

9月開催の
いきがい・助け合いサミット in 神奈川にお役立てください

いきがい・助け合いサミット in 大阪 『助け合い大全'19』

2019年9月に開催した「いきがい・助け合いサミット in 大阪」のすべてを収録した『助け合い大全'19』です。

サミットでの全体シンポジウムと各分科会における発言要旨をまとめた『パネル編』、ポスターセッション出展の全作品を掲載した『ポスター編』、そして『提言編』を3冊セットで頒布しています。9月1・2日開催の「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」の参考資料としてもご活用ください。

お申し込みは当財団まで

→電話 (03) 5470-7751

1セット2,000円(税込み) 送料別途

※3冊セットのみでの頒布となります。

【助け合い大全'19 提言編 目次】

- いきがい・助け合いサミット in 大阪の意義と特徴
- 全体シンポジウム発言要旨
- 分科会1～54
提言／登壇者／議事要旨
- ポスター展
- いきがい・助け合いサミット in 大阪を振り返って



ポスター編



提言編



パネル編

今風女子 89歳

良いことも、

つらいこともあってこそ人生

滝野 文恵さん

キラキラの衣装とポンポン、弾けるような笑顔でみんなを元気づけるチアダンス。それは、若者だけのものではありません。25年前の日本で、誰も思いつかなかったシニアのチアダンスチームを結成した滝野文恵さんとは、どんな人なのでしょうか。

(聞き手／塩瀬 潔泉)

気が強かった子ども時代

「まあとにかく、かわいげがない(笑)。その一言に尽きるような子だったと思います」

苦笑いしながら自身の幼少期について語ってくれたのは、滝野文恵さん(89歳)。昭和7年、父の赴任先だった広島県福山市で生まれ、両親と、

姉、兄、弟
の4人きよ

うだいの家庭に育った。食べ物にしても人にも好き嫌いがはっきりしており、母が出してくる食事も嫌いな物を食べるくらいなら餓死してもいい!というくらいの勢い。小学3年生のときには担任の先生が嫌いで猛反発し、一番前の席に座



らされた。しかし、そんな気の強い滝野さんを、子どものように開放的な性格だった父親はとてかわいがってくれたそうだ。

滝野さんが幼稚園の頃、家族は大阪に移り住んだ。女学校の友人たちと宝塚歌劇団の追っかけばかりしている滝野さんを心配した両親に、「頼むから進学してくれ」と言われ、短大の英文科に入学。あるとき、知人が乗馬に連れて行ってくれたが、その馬場に偶然、関西学院大学馬術部が居合わせた。乗馬がすっかり気に入った滝野さんは、「関学に行けば馬に乗れる」と、試験を受けて同大学に編入。「学業よりも馬」の大学生活を終えると、父親が「これからは女性も自立しなければ」



滝野さん、10代の頃

と留学させてくれた。アメリカ・ミシガン州の大学の寮生活で、仲間とアメリカ流の青春を思いきり楽しんだ滝野さん。父親が言った通り、女性でも自立するという素地がこの時期、養われたのかもしれない。

“良妻賢母”に憧れて

帰国後は大手メーカーに就職して会社員となったが、以前の知り合いだった、夫となる8歳上の男性（現在は故人）に熱望され、25歳で結婚。まもなく長女を、3年後に長男を出産し、32歳のときには夫の転勤で東京に住むことになった。

「『良妻賢母』という言葉がなぜかとても好きで、家事・育児は完璧にしなければ気が済みませんでした。今思えば、誰に言われたわけでもないのに、自分で自分を追い詰めていましたね」

楽しいこともある生活だったが、良家のほんぼんで、滝野さんが笑っていいようが悲しんでいいようが気にかけない夫に、長年の違和感がどうしようもなく募っていった。夫とは何度か話し合ったが

状況が変わることはなく、長男が大学を卒業した年のある日曜日の朝、滝野さんは家族に「家を出て、一人で暮らしたい」と告げた。夫は最後まで滝野さんの気持ちに寄り添うことなくあきれいていたが、母親の苦悩を一番近くで見ていた子どもたちは、「いいんじゃない」と言ってくれた。

思い立ったが吉日！ 53歳で2度目のアメリカ留学

こうして、滝野さんが離婚しないまま一人暮らしを始めたのは、52歳のとき。自由な生活がスタートした。

同時にこの時期は、あれほど自由奔放で人生を謳歌していた最愛の父親が、最後の数か月間は全く無気力になって亡くなる様子を目にして間もない頃でもあった。人が生き、人生を終えるということについて考えさせられていた滝野さんは、あるとき、友人が学んでいた「老年学」を思い出した。そして、人間が老いていく過程を学べる老年学なら、生と死への向き合い方がわかるかもしれ

ないと考えた。

思い立ったが吉日、「これ」と決めたら行動に移す性格の滝野さんは、再びアメリカに留学して老年学を学ぼうと決心。しかしどうすればよいかわからないので、とりあえず駐日アメリカ大使館に直訴の手紙を出すと、大使館から呼び出しが来た。

「歳が歳だから、とにかく早く留学させてほしい」と訴えると、何と、仮の学生ビザを発行してくれたという。さらに、留学に必要な試験をこれからクリアするのは厳しいと判断するや、留学先であるノーステキサス大学の学部長に、これも手紙で直訴。それがまたもや功を奏し、入学許可が下りた。

夢をかなえるには、このくらいの情熱と行動力が必要。そして、年齢は関係ないのだと勇気をもたえる話である。

大学での勉強は、若い頃に英文科で学び、留学経験もある滝野さんでも大変なものだったという。それでも、友人や教授たちとの交流、老人ホーム



アメリカ留学の卒業式での滝野さん

でのインターンなど、アメリカでの学生生活はたくさん思い出とともに充実したものとなった。

吉日再来！ シニアのチアダンスチーム結成

57歳で帰国し、週に何日か仕事をしながら生活していた滝野さんだったが、「大体、10年おきに何か起きる」とご本人が言う通り、次の大きな転機は62歳で訪れた。

アメリカの中高年に関する本を読んでいると、「アリゾナ州サンシティに、シニアのチアダンス

チームがある」と、ほんの2行程度書いてあるのが目に留まった。

「ええっ、中高年がチアダンスを？ 私もやりたい！」

再び、思い立ったが吉日。滝野さんはこの2行の情報だけを頼りに、サンシティの郵便番号とチアダンスチームの名称のみを宛名にして手紙を出した。すると、町の郵便局がチームの代表者に手紙を届けてくれたそうだ。

滝野さんの強運は、またしても海を越えた。

代表者との文通でいろいろな情報を得た滝野さんが、友だちを集めて「一緒にやらない？」と声をかけると、数人が「やる！」と乗ってきた。集まったのが東京・渋谷だったことから、そのままの勢いで青山学院大学へ。いきなり「チアを教えてほしい」と頼まれてほうぜんとするバトン部のキヤプテンを巻き込み、平成8年1月、都内のシニアセンターで、平均年齢63歳のチアダンスチーム「ジャパンボンボン」の活動が5人でスタートした。

その後、マスコミに注目されるなど、現在のメンバーは19名。平均年齢も70代になった。メンバーの皆さんもやはり活動的な人たちなのですか、と聞くと、

「私も、中高年になってチアを始めようというのだから、きつと進歩的な人たちが来るだろう、私も含めてちよっとユニークな人たちだろう、と思っていました。でも違うんです。『え、この人が？』というような、まさに真面目な日本の専業主婦。ほかの人たちと何が違うのか、いまだに本当にわからないですね」

前の週に覚えた振りは忘れてしまう、1曲マスターすると前の曲は忘れてしまう。コーチの忍耐力は上がるが、やはり発表する場が必要だということになり、大会に出場するほか、節目節目で周年発表会を行っている。発表会はチャリティショーとし、自分たちが楽しませてもらっていることへの感謝として、ユニセフや東日本大震災の被災地へ寄付している。

「見た方々が喜んでくださるのを見てはじめて、

自分たちの楽しみでやっていることだけど、それで元気になってくれる方もいるのかも、と気づきました」

*サンシティ……1960年につくられた退職者のための町（リタイアメント・コミュニティ）。商業施設、医療施設その他の機能が揃っており、55歳以上の人が居住できる。

健康だと思ってるのがいいんです

来年1月には卒寿を迎えるが、そんなイメージとはほど遠い滝野さん。昔から堅い食べ物が好きで、最近、耳のあたりが痛いので耳鼻科を受診したら、「堅い物の食べ過ぎです」と言われたそうだ。今でも、外出先で発車しそうなバスには走って乗り込む。今はコロナ禍で、緊急事態宣言中は週1回のジャパンポンポンの練習も休みになるので、NHKの朝の体操を日課にしているが、昨年のステイホーム中に「大人の塗り絵」にはまり、一日中座って塗り絵をしていたら軽度の下肢静脈瘤になってしまったそうだ。

「今のところ、悪いのはそこだけですわね。健康診断は受けない。自分の血圧も知らない。健康だと思っっているのがいんです」

全部ひっくるめて、人生

その行動力とバイタリテイばかりに注目してしまいがちだが、取材では終始笑顔で、穏やかに話してくれた滝野さん。人見知りで、自分から話しかけていくのが大の苦手なのどうか。

「娘に、『チームをまとめるなんて、ママ、一番苦手なことをやってるのね』と言われたこともあります」

70歳頃からは、関西学院大学同窓会東京支部のウクレレサークルにも参加している。

「ほとんどエアウクレレ（笑）。仲間と会っておしゃべりするのが目的です」と楽しそうだ。

「自由にいろいろなことをやってきて、これでも理想の家庭まで築いていたなら、私はきつと鼻持ちならない人間になっていたでしょうね。うまくいかない家庭があっても、『あなたのやり方が悪



ジャパンボンボン 20周年発表会にて。前列中央が滝野さん

いんじゃない？」と平気で言ってしまうような人間に。つらい時期もあったからこそ、人の気持ちもわかるようになったと思うし、良いことも悪いことも、全部ひっくるめて、人生ですわね」



住民自治から助け合い活動へ 高齢化した一戸建て団地の取り組み

西楽田ささえ愛の会（愛知県犬山市）

超高齢化が進む一戸建て団地において、「贈る活動・受ける笑顔」をスローガンに、日常の困りごとを支援する助け合いを行っている「西楽田ささえ愛の会」。市の生活支援体制整備事業をきっかけに生まれ、充実した自治会活動と盛んな地域活動を通して育み、深めてきた地域の絆をもって活動を創出・運営。住民同士の結び付きも一層強まり、安心して活力のある地域づくりが広がっています。（取材・文／城石 眞紀子）

超高齢化が進む団地内で
住民の不安や不便が増大



愛知県の最北端、木曾川が濃尾平野へと流れ出る木曾川扇状地（犬山扇状

地）の扇頂部に位置する、人口約7万3000人の犬山市。江戸時代には犬山城の城下町として発展し、現在もその歴史の足跡が多く残されている。羽黒・池野地区、楽田地区に分け、それぞれの地区で抱える課題や将来どのような地域にしていきたいかなどの

同市では、2017年度から生活支

話し合いの場（協議体）を立ち上げることを目的に、同年10月、当財団も協力した体制整備事業セミナーを開催。そこから地区ごとに協議体が立ち上がり、町内会単位での見守りや支え合いの体制づくりが進んでいる。

こうした動きの中で、いち早く体制づくりに取り組んだ栗田地区の西栗田団地では、19年6月から、有償ボランティア組織「ささえ愛の会」が、団地住民を対象とした日常の困りごとをサポートする生活支援を開始した。

同団地は市中心部から離れた最南部にあり、50年ほど前に分譲が開始された一戸建ての団地。477戸に1306人が暮らしていて、高齢化率は42.4%。子ども世代が独立して核家族化が進み、現在は高齢者世帯が全体の20%以上を占めるまでに。また、独居高齢者も60名に上っている。

一方で、団地内は今年で創立50周年

を迎えた自治会を中心に結束し、地域活動も盛んである。16の任意団体が地域住民を対象に活動し、責任者でつくる「ふれあい談話室」を全体の窓口に



自治会発足50周年記念碑



活動拠点の集会場

して親睦を深めたり、自主防災や防犯にも取り組むなど、住民自治によるまちづくりを推進してきた。

「自治会は6町・28ブロックから構成され、毎年10月に開催されるブロック集会（全体会議）では、新たな役員を選出のほか、その時々地域の実情や課題についても意見交換がなされます。その話し合いの中で、近年、高齢化が進むことで日々の暮らしにちょっとした不安や不便を感じる人たちが増えているとの問題提起がありました。そんなときに、体制整備事業セミナーの開催案内をいただき、当時の自治会長と役員計3人が参加。それをきっかけに全国での助け合いの取り組みを知り、西栗田団地でもこれからはそうした活動が必要ではないかという機運が一気に高まりました」と話すのは、同会の立ち上げに尽力した運営委員事務局の飯田ひろみさん。

活動への理解と意識を醸成して 自治会主導で体制づくり

そこからの動きは早かった。楽田地区の協議体に参加して情報提供や助言を受け、自治会主導で活動創出に向けての体制づくりに着手。翌18年3月、



活動開始前に、個人情報保護に関する勉強会も開催

まずは助け合いとは何かを住民に知ってもらうことから始めようと、団地内の集会所にて全世帯を対象とした自治会主催の講演会「西楽田団地で暮らし続けるために・みんなで考えましよう」を開催。犬山市健康福祉部高齢者支援課の葦澤絵美さんが講師として登壇し、「なぜ、いま助け合いが必要なのか」を話した。そして、4月からはニーズを探るためのアンケート作りを開始。「ここが最大の山場でした。10月に自治会のブロック集会有るので、そこまでに集計が間に合うよう計画を立て、内容を検討。若い世代も巻き込みたいとの思いから、関心の高い防災についての項目も設け、成人1名につき1部を基本とし、家族が多い場合は年長者から4名に回答してもらうよう、協力をお願いしました」

配布と回収を自治会班長が担ったことで、82%という高い回収率となった。

その結果報告をブロック集会で言い、12月には活動説明会を開いて協力会員の募集を開始。翌19年3月にその参加予定者で「活動立ち上げ世話人会」を開催し、組織運営の詳細を決定。飯田さんと共に熱意をもって活動創出を進めてきた元自治会町会長の馬場修さんが初代代表に就き、同年6月に活動が開始された。

「一連の準備にあたっては、市の担当者の葦澤さんに相談しながら進めてきました。何からどう手をつけていいのか右も左もわからない中で、その都度的確なアドバイスをいただけたのはとてもありがたかったですね。おかげで住民の皆さんの助け合いへの理解も進み、活動説明会では出席者30名のうち17名の方が、その場で活動に参加予定として記名してくださいました。これには本当に感謝感激でした」

こうして船出を果たしたささえ愛の

会だったが、活動開始直後の同年8月に代表の馬場さんが急逝。動揺が走る中、運営委員の一人で、現代表の鈴木満男さん（80歳）が代表代行を引き受けたことで、活動を止めることなく歩みを続けることができたという。その鈴木さんは、「前代表の馬場さんと飯田さんのお二人がレールを引いてくれたからこそ、ささえ愛の会ができた。その活動を引き継いで、西楽田団地の皆様に少しでも喜んでいただけるような運営をしていくことが、天国にいる馬場さんへの一番の供養になるという思いでやっています」と話してくれた。

育んできた共助の精神 みんなでやる楽しさ

ささえ愛の会も3年目に入り、活動に参加する会員数も22名に増えるなど一歩一歩前進中。支援は、日常のささいな困りごと、不安や不便の解消を目



支援活動の様子

的に、1回1時間以内を基本として、できる人ができる範囲でお手伝い。高齢者に限らず、団地内の全住民を対象としていて、利用料金は協力会員（世話人）1人につき1回100円。利用料は運営費として、会で使う道具などの購入に充てられ、協力会員には謝礼として、活動後にペットボトルの飲み物1本が支給される。「昨年度の活動実績は47件。依頼が一

番多かったのは、庭木の剪定・草取りです。そのほか、傾聴、蛍光灯の交換、建具の直し、家具の移動、ごみ出しなど。利用の流れとしては、電話で会に依頼が入ったら、事前に依頼者の家を訪問して依頼内容の詳細について打ち合わせを行い、指示書を作成します。例えば庭木の剪定であれば、どの木をどの程度切るかまで、写真を添えて細かく指示。この指示書を基に作業して

いただくことで、スムーズな支援の実施につながっています」（飯田さん）

こうした細やかな気遣いが利用者にも好評で、「連絡したら、すぐ来てくれた」「とても助かっている」「心強い」と、住民の皆さんは感謝の言葉を口にします。

団地内は多種多様な人材の宝庫。協力会員にも、プロ級の剪定技術を持つ人、習字や絵が得意な人などがいて、

そうした特技を惜しみなく発揮するので、活動案内や活動報告のチラシもぬくもりのある手作り。だから、作業に必要な道具を自ら買いに行ったり、自分たちで道具を持ち寄って作業をしたり、回覧板を回しても目に留まるなど、それぞれが自分のできることで積極的に参

加しているとのこと。

「この団地の人たちは、優しい気持ちにあふれたボランティア精神のかたまりなんです」（飯田さん）と言うが、取材当日に集まってくださった運営委員や協力会員の方々も、「皆さんのお役に立てることがあれば」「地域に貢献したい」と口々に話されたのがとても印象的だった。

聞けば、ほとんどが民生委員や自治


【贈る活動・受ける笑顔】 2020年6月18日

■ 〇〇さん（22B-2）の庭木の剪定依頼のお願い

実施予定日 7月3日 金曜日 8時～（雨天延期）

世話人 ・ 〇〇様 ・ 〇〇様
 ・ 〇〇様 ・ 〇〇様
 ・ 〇〇運営委員 ・ 〇〇運営委員

支援内容については、「お任せ」なので、全体をさっぱりする



・ 〇〇の正面右
 ・ 〇〇正面左
 ・ 枯葉は低く、短く
 ・ 3m以上の木が2-3本あるが、触らない

・ 門の中全体やつつじなどの木を切り、全体をさっぱりする
 ・ シラカシは2mで切る

依頼指示書に沿って支援を実施

贈る活動・受ける笑顔 『ささえ愛の会』

活動中

回覧板の制作中

剪定の前後作業

地域の交換

剪定作業中



回覧板や掲示版用のチラシも手作り

『ささえ愛』

“心は、笑顔とありがとう”

活動案内

回覧板・回覧板制作

回覧板の制作中

活動案内の依頼人

手付け版用紙



会役員の経験者や、ふれあい談話室の参加者。防犯協力会の会長、災害ボランティアアワードイネーターなどいくつもの地域活動を兼任している人も多い。「この町に住んでよかった」と思える、安全で楽しいまちづくりを自分たちの手で築きたいという思いも強く、みんなが協力して1つのことをやる楽しさも知っている。そうした共助の精神を50年の歴史の中で培い、結束を強めてきたことこそが、西楽田団地の最大の強みであり、それが助け合い活動の創出や運営にも生かされている。

自分の居場所と出番があることが生きがいにもつながる

助け合い活動に対する思いや感想も聞いてみた。

87歳の一人暮らしの女性のごみ出しを支援している協力会員は、「今年の2月に依頼があつて1週間交代でやっ

ているが、初めは沈んでいた利用者さんが顔色からして全然違つてきた。ごみ出しついでのちよつとしたおしゃべりをすこく楽しみにしていて。そういう姿を見ると、いい活動に参加できてよかったと思う」と話す。また、草刈りや庭木の剪定の支援をしている協力会員は、「高齢化で自宅のメンテナンスができない方が増えているが、作業が終わつた後に『ありがとう』という言葉をもらえることが、やりがいになっていく」と話してくれた。また、「今、誰かのために何かをするということは、結局は自分のためにもなること」「いずれは自分も助けられる側にまわるのだから、体が動く限り続けていきたい」との声も聞かれた。



運営委員と協力会員の皆さん。
前列中央が代表の鈴木さん、その右が事務局の飯田さん

そんなささえ愛の会について、結さんは、「西楽田団地は昔から住民同士の結びつきが強くて、私たちが特に背中を押さなくても自発的に動いてくれた」と前置きした上で、こう続けた。

「活動を創出する上では、行政を上手に使ってくれた例だと思いま



市の担当者の蒔澤さん

す。例えばアンケート調査ひとつにしても、その手順をすごく考えられたと思うんです。突然家にアンケートが送られてきたら、『何これ?』ということになってしまいます。だから、その前に講演会を開いて、市役所が来て話をしたということは、市でもこれを何とか進めようとしているんだということに住民さんにわかってもらおうという手順を踏んだのではないかと。その後の立ち上げについても、単独でやるのではなく、自治会の下部組織にすること、協力会員が補償保険を使えるようにしたり、補助金が付いてきたりと、会を継続維持させるだけのベースを整

えたところが良かった点だと思います」

今、犬山市でも、また全国各地でも、支え合いの仕組みづくりが進む一方で、二の足を踏む地域もまだまだ少なくない。実は、飯田さんも当初は「自分たちの手でシステムをつくるなんて、ましてや自分がそのつくり手側にまわるなんて、とても無理」だと思ったそう。しかし、わからないながらもやってみれば、地域には多くの協力者がいて、誰かのためになることは結果として自分のためにもなり、生きがいづくりにもつながることを実感しているそう。鈴木さんも、「みんなの力を合わせて、ささえ愛の輪を広げていきたい」と力強く語ってくれた。

まずは、一歩踏み出すことが大切だ。

西楽田団地における住民主体の助け合い活動。「おたがいさま」の気持ちで、協力者は思いやりを、利用者は感謝をもってお互いが気に掛け合い、誰もが安全で安心して暮らせる地域づくりを目指している。活動内容は、行政や業者（介護施設など）が行っているサービスのすき間にある簡単な困りごとのお手伝いで、庭の草取り、庭木の剪定、ゴミ出し、家具の移動、掃除、買い物の付き添いなどを基本に、1時間以内で完了するサービスを提供。利用料は、協力会員（世話人）1名につき1時間100円（2名の場合は同200円、5名の場合は同500円）。ゴミ出しのみ1回50円。利用料は運営費に充てられ、協力会員には活動後にペットボトルの飲み物1本が支給される。

西楽田でささえ愛の会

●連絡先／〒484-0934 愛知県犬山市字中唐曾1-59 西楽田団地集会場
電話 0568-67-4648
(月・水・木曜10～12時、火・金曜13～15時)

大好評

動画『NEXT ~心と心をつなぐ工夫と取り組み~』

ご活用ください!

コロナ禍にあっても、アイデアと工夫でみんなが笑顔になれる活動を紹介している当財団制作の動画「NEXT 心と心をつなぐ工夫と取り組み」(各8分程度)。皆様から大変ご好評いただいています。コロナの時代における助け合い活動のヒントとして、生活支援コーディネーターの勉強会のツールなどとして、ぜひご活用ください!

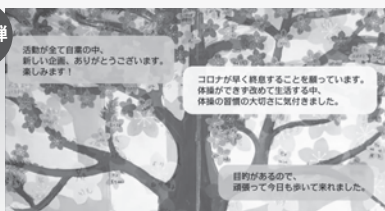
NEXT

心と心をつなぐ工夫と取り組み



第1弾

奈良県生駒市



あなたの「元気」を届けよう
プロジェクト

第2弾

静岡県袋井市



出前居場所・青空居場所・
我が家のごはん届けます

第3弾

大阪府門真市



こんな時こそ地域の力で、
ゆめ伴プロジェクト

第4弾

新潟県新潟市



受け身にせず
「みんなで守ること」で活動再開

第5弾

岡山県倉敷市



つながる回覧・
マスクプロジェクト

第6弾

神奈川県鎌倉市



食を通じた居場所(みんなのたべ)・
フードパントリー

動画は、当財団ホームページでご覧いただけます。

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/movie-next/>

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、コロナ禍での困りごと解決のための活動や、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みを支援している「地域助け合い基金」。今月号も、配食兼見守りや高齢者の買い物支援、子ども食堂の活動への助成をご紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに続々アップしていますので、ぜひご覧ください。

神奈川県横浜市

コロナ禍にも訪問を絶やさず
今後も手作り弁当を届け続ける

助け合いグループ「春一番」

助成金額 15万円

助け合いグループ「春一番」では、一人暮らし高齢者・障がい者・高齢世帯で、買い物や食事の用意ができない方を対象として、月4回土曜日の夕食を調理してお弁当とし

て配達するとともに安否確認を行い、状況によっては地域包括支援センターにつなぐという活動を長年実施してきました。包括の生活支援コーディネーターとは、利用者に異変があったときの対応、地域町内会の会合で春一番を紹介する取り組み、春一番の総会や運営委員会において意見をもちょうなど、連携しています。

一昨年末、配食用弁当箱が大幅値上げになるとの業者からの情報があったため、値上げ前に約1年分を購入しましたが、その後コロナ禍となり活動休止に。利用者からの料金が入ってこなくなったことから、出費だけが大きくかさ

むことになりました。

その後、活動を再開しましたが、厨房に入る人数がそれまでの半分以下に制限されました。今まで1個500円だったお弁当を作ることができず300円になり、利用者も減少して、赤字が大きくなり膨らんでしまったことから本基金に応募。助成金で、食材、調理消耗品、事務消耗品、活動協力費を補っていただきました。コロナ禍の昨年3〜6月、配達ができなかった期間は、利用者の安否確認のために、ペットボトルのお茶やお菓子を持参して訪問。利用者の皆さんは、心配した健康状態も



良く、訪問したメンバーを気遣ってくれたといえます。また、外出できない状態なので訪問はとても喜ばれ、話が尽きなかったそうです。

「これからも安心して食べていただける家庭の味を届けたい。また、顔を合わせ、言葉をかけ、利用者の状態に合ったつながりを持ち安否確認をして、住み慣れた地域で安心して暮らせる活動をしていきたい」と、報告書で決意を語ってくださいました。

静岡県御殿場市

買い物支援を開始

高齢者のフレイル予防、外出機会にも貢献

北久原移動支援プロジェクト

助成金額 13万1000円

北久原移動支援プロジェクトは、昨年9月から活動を開始。北久原区長、議長、民生委員、高齢者サロン運営者、地域福祉推進委員会委員長など地域の理解を得ながら、地域の有志ボランティアが、住民のフレイル予防を兼ねて買い物支援を無償で行う活動を始めました。毎週木曜日、市

内の社会福祉協議会の車両を借りて、地区住民の運転ボランティアと付き添いボランティアが参加者を見守りながら、スーパーでの買い物物送迎。免許返納や車を持たないため、移動が困難な独居高齢者を支援しています。

本基金の助成金は、コロナ感染対策として、非接触式体温計、アルコールタオル、アルコールスプレー・詰め替え用、マスク、参加者へ支援実施を通知するためのコピー用紙、名入れブルゾン、文字データ作成・印刷代、利用者活動保険料、切手代に充てていただきました。

「名札だけでは目立たず、黄色のブルゾンを着て活動すると不審者と間違われなくて良い。大変助かっています」とのことです。



ボランティアは黄色のブルゾンを着用し、非接触式体温計で利用者の体温を測って買い物を支援

参加者からも、「普段、バスを利用していると、たくさん買い物をするができない。この買い物支援は、自宅前まで車が来て送り迎えしてくれるので、米、調味料など重い物を買うことができて助かる」「家にいることが多く、出かける機会が少ない。買い物に連れて行ってもらい、自分の目で商品を選ぶことができうれしい」といった声が届いているそうです。

和歌山県橋本市

多様なつながりを生かし 子ども食堂が家庭に食料を届ける

わいわい子ども食堂はしもと

助成金額 15万円

わいわい子ども食堂はしもとは、2017年から活動を開始。毎月第1・第3火曜日に市の保健福祉センターで子ども食堂を実施しており、毎回、子どもと保護者70名ほどが利用しています。食事は、地元農家から野菜の提供を受けるなどして、10名ほどのスタッフが約3時間かけて作り、地元高校の生徒も配膳などの手伝いに来てくれています。

食堂に来るのは低学年や未就学児も多いことから、折り紙工作、塗り絵、あやとり等の遊びを取り入れたり、季節のイベントも行ったりしてきましたが、コロナ禍ではそれらは中止となりました。

昨年12月からは、経済的に困窮している子育て家庭に食料を届ける活動を開始。本基金の助成金も、この食料配布のための食料購入と事務費に活用されました。また、第1回目の12月24日には、ある企業から大きなクリスマスケーキを各家庭に1個ずつ配ってくださったとの申し出があり、食料と一緒に届けることができました。それ以降も、毎月第4金曜日に子育て世代包括支援センターと共同で食料を届けており、活動に賛同する企業からお菓子や食料の提供も受けて活動しています。

ボランティアスタッフも、食糧支援活動を契機に参画してくれる人が増え、支援する家庭も10世帯から12世帯に増えました。当初、6か月を予定していた活動でしたが、コロナの収束が不透明な中、さらに6か月延長して活動することにしたそうです。

子育て世代包括支援センターからは、「ご家庭にとってはこの活動が命綱となっています。とても喜んでくださっ

ており、私たちもその笑顔がうれしいです」という声が寄せられ、「このような声が私たちの励みになり、これからもより一層頑張らねば」と張り切っています」との報告をいただきました。

現在、橋本市内には5つの子ども食堂があり、昨年度、それらの子ども食堂と市とで「橋本子ども食堂連絡協議会」を立ち上げました。子どもたちもつと子ども食堂にアクセスしやすいようにと「子ども食堂開設の手引き」も作成したので、活用していただければ、ということなのです。



「地域助け合い基金」状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。

7月15日までの状況をご報告いたします。

◎寄付受付額

197件 1044万700円

このほかに当財団より9千万円を供出

◎助成実行額

538件 7241万6350円

(7月15日 当財団ホームページ開示時点)

本基金には、これまでに約200件のご寄付を頂戴しております。ご支援くださいました皆様に、心より御礼申し上げます。

長引くコロナ禍はさまざまな方面に影響を及ぼしていますが、長年助け合い活動を継続してきた団体にも大きな影響が出ています。皆が集まって交流し、助け合いの基

礎をつくってきた居場所や子ども食堂は、人数の制限や感染予防によりこれまでの方向を転換せざるを得なくなりました。しかし、地域の方々
が知恵を絞り、居場所の参加者の自宅を訪問したり、子ども食堂がフードパントリーや配食に活動を変更したりしてこれまでのつながりを維持しているほか、コロナ禍をきっかけに困窮家庭への支援を広げたりしています。詳しい活動報告は、本誌28ページからの助成先紹介記事、また財団ホームページにも掲載していますので、ぜひご覧ください。

地域共生社会実現のために、引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

(事務局長・内田)



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ
基金関連ページ

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください!

基金に関する
ご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆様からのご寄付をお待ちしています！

1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含まれます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3. ご寄付の方法

(1) 銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通） 口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通） 口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

(2) 郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、一言応援コメントなどをご記入ください。また、手数料不要の払込取扱票をご用意いたしますので、お申し出いただければ郵送いたします。

(3) クレジットカードによるご寄付

前ページのQRコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<寄付・助成のお問合せ>
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

老いの暮らしを創る

早めの引越

④

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

始まりました！ 私たち7人の近居生活。

果たして上手くいくのだろうか。この試みを知っている友人たちは、興味津々。そうは長続きしないだろうというのが、もっぱらの評判でした。何しろ7人の仕事は、実にさまざま。心理カウンセラー、コピーライター、福祉関係者、新聞記者、着物の季刊誌を発売している人、広報関係者、そして私は放送関係と皆、長いこと男社会の中で仕事をしてきたのですから、自己主張は激しく、よくも悪くも個性が強く、共に暮らすなんて出来っこないと、踏んでいたようです。私たちにとっても又、未知との遭遇です。

まずはグループ名をつけることにしました。私たちが考える暮らしの基本は「ひとりで生きる、みんなで生きる」です。つまり一人一人は自分の暮らしを大事にしながら、お互い助け合って暮らす、そしてそれぞれの経験と人脈を活かして地域で活動する、というものです。このキャッチコピーに見合う名称は何か。

「ひとり」は「個々」だ。

「みんな」は「セブン」だ。

「個々セブン」がいい！

この私の提案に「一票！」と言う人もいれば、強烈に「NO！」と言う人も。結局多数決で「個々セブン」となりました。しかし修



正提案が出ました。私たちは皆個性が、というかアクが強い。しかもあっち向いたりこっち向いたり。従って「個々」ではなく「個個」と、字もそれぞれ独立させた方がいいと思うものでした。全員納得で一件落着です。

事程左様に、どんな小さなことでも話し合い、全員が納得するまでは次に進みませんでした。言ったの言わないの、聞いたの聞いてないの、というトラブルを避ける為でもあります。

私たちのグループには、いわゆるリーダーはいません。皆、一国一城の主。7人が7分の1ずつの負担と責任を負う、ということです。誰か1人が旗ふりをし、他の人はただついていくだけという関係では、1人に負担がかり過ぎ、燃え尽きてしまいかねません。フラットな関係性は、緊張感を伴うと同時に、居心地の良いものでもありました。

旅行、食事会、観劇等々、暮らしの楽しみは参加するも良し、しなくても良し。全員参

加は誕生会と読書会等、そして私たちのメイソイベントでもあるサロン活動です。これは一人一人のネットワークを活かして講師をお招きし、友人・知人に声をかけて共に楽しむ交流会です。参加者はお茶とケーキの実費。

講師にはお車代ともいえないような謝礼でお願いしました。7人7様のネットワークですから実にさまざまな分野の、バラエティに富んだ方々にお出でいただきました。100回記念は、NHK時代の私の先輩、下重暁子さんが華を添えてくれました。

近居生活を始めた時は60代、70代だった私たちも、今は70代、80代。更なる老いに、あちこちの身体の不具合は否めません。入退院を繰り返し家での暮らしがむずかしくなると老健やショートステイを利用しつつ暮らしていた仲間は、サロンへの参加が難しくなりました。また軽い脳梗塞に見舞われたり、物忘れがひどくなり認知症への不安を度々口にする人もいます。私たちはお互い介護はしない



と、最初から決めていました。出来るのはちよつとした手伝いや励まし、情報提供などです。このことがまさかのときのもたれあいにつながらず、出来ることは助け合うという関係性を保てたのだと思います。

そして、私。

行ったり来たり2地域居住と言う形での暮らしは80歳までは続きたいと仲間に話していましたが、その80歳が視野に入ってきました。いずれは処分しなければならぬ部屋。

体力・知力もまだ残っているうちにと軽い気持ちで売りに出したら、あつと言う間に買い手が現れ、あれよあれよの引越しとなりました。サロン活動はその後も続き、コロナの感染拡大でやむなく休止するまでの11年間、一度も途切れることなく続けました。毎月、お願いする講師を決め、交渉し、参加者に案内を出し、当日には会場のセッティングをする。そして後片付け、来月の予定を

たてる。こうした活動を通して、つながりは深まっていき、仕事三昧で過ごしてきた私たちでも少しはその経験を還元できたかなと、ひそかに満足しています。

年を重ねるに連れ一般的には、とかく安心・安全ばかりを求め、暮らしを小さくするように見受けられます。もちろんそれは大事な要素ですが、もう一つ、刺激的という暮らしを、老いても続けていきたいと思うのです。高齢期はとかく思い出話に終始しがちです。昔を思い語ることという回想法は認知症予防に役立つと、認知症研究・治療の第一人者である遠藤英俊さんがエビデンスを出されました。「50歳を過ぎたら回想法年齢と思いなさい」とも仰っています。しかし思い出を語るばかりでは能がありません。思い出は、生涯にわたってつくり続けていくもの。そのためには未知との遭遇を楽しむという気持ちを大事にしたいものです。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。現在、江戸川総合人生大学「介護・健康学科」学科長。

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

NEWS & にゅーす

さわやか活動日記(抄)





北から
南から

新地域支援事業・ 各地の動き

(2021年6月1日～30日)

- 全国各地で、
推進の支援をしています
- 活動の一部を紹介しています

生活支援コーディネーター・ 協議体と連携

滝沢市(岩手県)

30日/岩手県のアドバイザー派遣事業による滝沢市の個別支援1回目。テーマは「地域の担い手養成講座」だが、講座への参加が目的でなく、参加者が助け合いを立ち上げる、または地域の

多様な活動に参加するなど、学んだ内容が地域で生かされるように市担当者と打ち合わせを行い周知したところ、20名募集に対し、若い人なども含めて25名ほどの申し込みがあった。

講座では、行政説明に続き当財団から「今、助け合いを広げるとき」として講演を行い、アイスブレイクとして「助け合い体験ゲーム」も入れながら多様な事例を紹介した。参加者の表情も良く、「とても良いきっかけをつくってくれた。こういう活動が広がればいいと思った」など意欲が感じられる意見も出た。第1層・第2層生活支援コーディネーターもファシリテーターで参加し、住民主体の事業推進を目指して共に動き出した。今後もバックアップしていく。(鶴山)

韭崎市(山梨県)

17日/山梨県の令和3年度生活支援体制整備アドバイザー派遣事業として、韭崎市の第1回支援をオンラインで行った。市からは行政担当者3名と市社

会福祉協議会の生活支援コーディネーターが参加した。相談内容は、体制の構築について、住民主体による2層づくりを具体的にどう進めていけばよいか。

最初に、市長寿介護課の丸山泰平氏を取り組み状況や課題等について話し、その後、当財団の進行で南アルプス市の斉藤節子氏から第1層・第2層の体制づくりなどについて、また、同じく南アルプス市の小林陽一氏からは2層協議体の運営について事例を紹介してもらいながら、住民主体の体制づくりと地域づくりを伝え、質疑応答や意見交換を行いながら理解を深め、今後について議論した。

同市では昨年度、モデル地区で第2層の協議体をつくっていきこうと動き出したが、コロナ禍もあり具体化が課題となった。今年度は、「基礎づくり」「地域へのアプローチ」「2層の体制づくり後の実践」を考えている。「今回の勉強会で、理解が進んでとて

もよかった。今後の2層づくりに向けて動き出したい」との反応をいただいた。財団として引き続きバックアップしていきたい。

(鶴山、三上)

市川三郷町(山梨県)

11日/山梨県の令和3年度生活支援体制整備アドバイザー派遣事業として22日に実施する、市川三郷町への支援に向けた打ち合わせが行われた。参加者は、行政担当者、町社協の生活支援コーディネーター、南アルプス市の斉藤氏・小林氏、当財団の鶴山・三上。

22日には、2層協議体の役割の共通認識を持てるようにし、事例紹介等を行うこととなった。また、同町の現状やこれまでの経緯について意見を出し、当日の話し合いで検討した方向性はその後の1層で共有していこうということになった。

22日/アドバイザー派遣事業による支援をオンラインで行った。同町の行政と社協から計11名が参加し、事業についての講義と質疑応答で理解を深め、

目的を共有することを目的としたもの。最初に、鶴山から「住民主体の地域づくりをどう推進していくか」として、事業の意義、助け合いを広める効果、生活支援コーディネーターと協議体の関係、目指す地域像等について講義を行った。次に、斎藤氏と小林氏から南アルプス市の事業の経緯や3層立ち上げまでの経緯等について紹介した。質疑応答では、「1層から2層、3層設立までの期間は」「2層と3層の違いは何か」「住民の心を動かすために具体的にどうやっているか」等の質疑が出され、事例を紹介しながら回答した。

終了後には、「伝えることの大切さ。チームづくり、住民の助け合いを紹介していくことも必要。それぞれの役割を意識しながら協力していきたい」などの感想が聞かれた。事業についての関係者の理解が深まり、前向きな意思が感じられる支援となった。今後、2層の体制づくりに向けて動き出す同町を支援していく。

(鶴山、三上)

富士川町(山梨県)

9日/山梨県の令和3年度生活支援体制整備アドバイザー派遣事業として、11日の第1回富士川町の支援に向けた事前打ち合わせを行政、町社協と行い、当財団の鶴山と三上はオンラインで参加。同町の概要と、これまでの体制整備の状況と課題について共有し、今後の方向性を確認した。

11日/アドバイザー派遣事業として、富士川町の第1回支援を行った。出席者は、県担当者、同町社協、地域包括支援センター、南アルプス市の斉藤氏と小林氏、当財団の鶴山と三上。同町は、住民主体の地域づくり推進のための2層の体制づくりに取り組むこととしており、まずは関係者で共通理解を持ち、行政と町社協の連携も進めることが狙いである。同町では、全15区で住民座談会を行っているが、目的や意義が明確にならないことなどを課題としていた。まずは、住民に支え合いと住民主体の必要性を理解してもらうた

めにフォーラム開催を計画したいとのこと。財団の進行で、フォーラムから体制づくりを進めた南アルプス市から、今までの取り組みを紹介してもらいながら、住民主体の地域づくりのポイントを共有していった。例えば、事業推進について、行政と社協ら関係者が共通理解を持つこと、あくまでも住民が主体であること、行政や社協はバックアップする立場であることなどを共有した。また、財団からは、ニーズと担い手の発掘、1層・2層・3層の役割や、協議体の目的等について事例を通じてアドバイスをを行った。勉強会后、フォーラムの前に関係者の共通理解を目的とした勉強会を開催したいとの意向を受け、取り組むことになった。引き続き支援していく。(鶴山、三上)

協議体編成のための 研修会・勉強会等に協力

渋谷区(東京都)

22日/渋谷区では、昨年度から生活支

援体制整備事業のさらなる推進に向け、関係者の協議で検討を重ねて準備を進め、当財団も情報提供などで協力してきた。この流れで、今回は笹幡地区の第2層協議体編成に向けた住民向けの説明会(第2層協議体研究会住民向け説明会)を開催した。すでに前向きな地域づくりが進められている地域性もあり、それらの取り組みと協議体との関係性など、参加者からは積極的な意見が出された。引き続き検討を重ね発足を目指す。(長瀬)

大野市(福井県)

15日/大野地区で「地域支え合いを考える会」が開催され、当財団も協力を

市内5圏域目となる第2層協議体の編成に向けた住民勉強会の2回目、地区の住民約20名が参加した。新型コロナウイルスの影響で1回目の開催から半年空けての開催となったが、第2層生活支援コーディネーターから1回目の振り返りを丁寧に行うことで当時の記憶を呼び起こし、財団からの「助け

合い活動を広げる具体的取り組み」の説明と、「地域の困りごと」を考えるグループワークへとつないでいった。

4つのグループからの発表では、さまざまな地域のニーズが浮かび上がってきたが、同時にどのグループも共通して「移動支援が必要」だということも認識できた。次回は「自分たちができること」を考え、協議体の活動をイメージしながら、住民中心となる協議体編成を目指していく予定。(高橋)

生活支援コーディネーター 養成研修等に協力

岩手県

2日/岩手県で行政向け研修会が行われ、当財団から堀田力会長と鶴山が協力。33市町村中17市町村から22名が参加した。申し込み時に「住民主体の助け合いを広める上で困っていること」を提出してもらい、それに沿って内容を企画した。課題として「やらされ感」が最も多く、講義、事例、ワークショ

ップにおいて、住民主体の事業を行政としてどう進めていくかをテーマとした。

堀田会長が講演で、「助け合いでも重要なのが住民主体。お金でなく、心をどう動かすか」と問題提起があり、新地域支援事業ができた経緯と意義、生活支援コーディネーターと協議体の役割、やらされ感がある住民への行政の働きかけ方（バックアップ）などについて話した。

事例紹介では、コロナ禍でも住民主体の地域づくりを推進しているフォーラムや、協議体の情報交換会、集落ごとの座談会など、感染防止をしながら住民の気持ちを動かしている山梨県南アルプス市と新潟県村上市を紹介し、グループワークで知恵を出し合ってもらった。

終了後のアンケートでは、「堀田会長の講話を初めて聞いた。助け合い活動の取り組み方法について参考になった」「多様なサービス、生活支援の事

例が参考になった」等の意見が見られた。同県では、今年度の個別支援で4市町村が手を挙げている。それぞれの課題に向き合いながら推進する、住民主体の助け合いの地域づくりを支援していきたい。（鶴山）

群馬県

21日／群馬県の県レベルのバックアップとして、県内を5ブロックに分けて進められている生活支援コーディネーター連絡会が、西部ブロックで開催され、当財団も協力。内容などを各ブロックに任せるという自由度の高い企画だが、西部ブロックは実質毎月開催しており、各自治体の最新の進捗状況などを確認できる貴重な時間が確保できている。今回も、積極的な意見交換と情報共有が行われた。県レベルの取り組みとして参考になる取り組みである。（長瀬）

埼玉県

10日／埼玉県生活支援コーディネーター基礎研修会のオンラインパートに、

当財団もファシリテーターとして参加した。参加者105名、参加対象は新任の生活支援コーディネーターおよび行政担当者。

今年度の同県の生活支援コーディネーター基礎研修は、動画配信パートとオンラインパートに分けて開催。講義はオンライン研修前に動画配信しており、財団も「生活支援サービス（助け合い）の創出」の講義を担当した。今回のオンラインパートは、その講義を受けて学んだことを、グループワークで深め、生活支援コーディネーター同士のネットワーク形成にもつなげるために設けたもの。プログラムは、第1層・第2層生活支援コーディネーターからの報告と、その生活支援コーディネーターが関わった活動実践者2名からの実践報告、およびグループワーク、質疑応答で構成。最後に、川越市の生活支援コーディネーター柴明孝氏がファシリテーターによるまとめとして「レスポンス良く地域に反応すること

が大事。そのためにも、地域を知るアセスメントは大切であり、さまざまな資源や人を巻き込み、活用していくことにより地域がつくられる」と締めくくった。

昨年度の同県の生活支援コーディネーター基礎研修は、受講生のオンライン環境整備が整っていないことから講義の動画配信のみだったが、次第に環境も整ってきた。また、オンラインであつてもグループワークは行つてほしいとの要望を受け、今年度はオンライン研修も実施した。生活支援コーディネーター同士のつながりも生まれ、グループでの情報共有により学びが深くなるのが感じられた。

山梨県

1日／山梨県の令和3年度生活支援体制整備アドバイザー派遣事業の内容検討に、当財団の鶴山と三上がオンラインで協力。今年度は7市町村から派遣希望があり、この日は直近4市町村（韭崎市、笛吹市、市川三郷町、富士

川町）の第1回個別支援について情報共有した。

また、9月に実施予定の生活支援コーディネーター養成・スキルアップ研修についても、開催形式や内容イメージを共有し、今後、具体的に詰めていくこととした。昨年度と同様、同県南アルプス市の生活支援コーディネーターである斉藤節子氏と小林陽一氏の協力も得て、各市町村で住民主体の地域づくりが進むよう支援していく。

（鶴山、三上）

愛知県

29日、30日／愛知県で生活支援コーディネーターのフォーアアップ研修がオンラインで開催され、約250名が参加した。同県では、オンラインによる開催は昨年度に続き2回目となるが、ともに当財団が企画段階から協力している。今回は年度の早い段階から準備を進めることができたため、全体を2部構成で計画し、この日は第1部として、特に新任者を対象に基礎的な制度

説明を行った。1か月後に開催される第2部では、実践的な内容を予定しており、県レベルの研修として経験年数を問わず幅広く対応できる内容で構成した。また、第1部は県内を2ブロックに分け、開催日時を変えることで参加しやすさを向上させたほか、第2部では4ブロックに細分化し、参加者が発言しやすい環境に配慮している。

（長瀬）

助け合いの地域づくりのために協力

川越市（埼玉県）

17日／川越市の「川越市サービスステーション」において、第3回「福祉相談窓口話し合い（会議）」が開催され、当財団も参加。同市は「重層的支援体制整備事業」に取り組み、すでに、子ども、障がい、高齢、生活困窮の4分野が参加し多職種協働の会議を行つている。今後さらに「参加」「地域づくり」を充実させていくために、主として「地域づくり」の面でのアドバイザー



ーとして財団が市からオブサーパー参加を求められて参加したものの。今後も依頼に基づきオブサーパーで参加していく予定。

(岡野)

(本稿は、岡野貴代、高橋望、鶴山芳子、長瀬純治、三上宗佑)

情報紙

助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

『さあ、やろう』
vol.16

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。新地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからもダウンロードできます。ぜひご活用ください。

【vol.16目次】

- *「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」紹介
- *サミットへようこそ～分科会めぐり～ 堀田力
- *さわやか座談会
「コロナ禍の中で生活支援コーディネーターと協議体はどのように活躍しているか」
- *「地域助け合い基金」状況ご報告
- *Topics コロナ禍の中でも助け合いを広めるために

【お問合せ】電話 (03) 5470-7751 メール post@sawayakazaidan.or.jp



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2021年6月1日～6月30日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日とずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人(61件)

(都道府県別50音順)

岩手県	菅原 清美	東京都	鹿野 哲	新潟県	金子 由美子	大阪府	池内 節子	徳島県	深田 普佐次
小野寺 隆一	橋本 玲子	鹿野 哲	蒲田 尚史	吉田 由依	吉田 秀一	大坂府	池内 節子	徳島県	坂東 恵子
島川 敏文	埼玉 雄	青木 武雄	木村 敏夫	倉持 喜久子	小泉 榮子	兵庫 県	今井 幸夫	香川県	原田 典子
宮城 県	内村 実佳	永末 厚二	三奈木 喜逸	佐々木 美智子	鹿野 真美	奈良 県	久保田 秀樹	熊本 県	木下 眞理子
河村 憲二郎	鈴木 文雄	高澤 秀明	野口 正二郎	林原 満子	保坂 雅宣	滋賀 県	脊古 光子	徳島 県	黒木 詔子
平野 陽子	鳥井 昭男	羽島 豊	松下 明子	森谷 公俊	神奈川 県	京都 府	梅沢 久子	徳島 県	黒木 詔子
福島 県	千葉 県	金谷 国士	鈴木 文雄	高澤 秀明	野口 正二郎	林原 満子	保坂 雅宣	神奈川 県	林田 規子
茨城 県	関 正樹	丹 文子	丹 協子	丹 文子	丹 協子	丹 文子	丹 協子	丹 文子	丹 協子
栃木 県	川崎 京子	石橋 幸恵	大坪 直子	三浦 靖夫	吉田 由依	新潟 県	金子 由美子	徳島 県	坂東 恵子
岩手 県	菅原 清美	東京都	鹿野 哲	新潟 県	金子 由美子	大阪 府	池内 節子	徳島 県	坂東 恵子
小野寺 隆一	橋本 玲子	青木 武雄	木村 敏夫	倉持 喜久子	小泉 榮子	兵庫 県	今井 幸夫	香川 県	原田 典子
島川 敏文	埼玉 雄	永末 厚二	三奈木 喜逸	佐々木 美智子	鹿野 真美	奈良 県	久保田 秀樹	熊本 県	木下 眞理子
宮城 県	内村 実佳	鈴木 文雄	高澤 秀明	野口 正二郎	林原 満子	保坂 雅宣	神奈川 県	京都 府	梅沢 久子
河村 憲二郎	鳥井 昭男	羽島 豊	松下 明子	森谷 公俊	神奈川 県	京都 府	梅沢 久子	徳島 県	黒木 詔子
平野 陽子	千葉 県	金谷 国士	鈴木 文雄	高澤 秀明	野口 正二郎	林原 満子	保坂 雅宣	神奈川 県	林田 規子
福島 県	関 正樹	丹 文子	丹 協子	丹 文子	丹 協子	丹 文子	丹 協子	丹 文子	丹 協子
茨城 県	川崎 京子	石橋 幸恵	大坪 直子	三浦 靖夫	吉田 由依	新潟 県	金子 由美子	徳島 県	坂東 恵子
栃木 県	菅原 清美	東京都	鹿野 哲	新潟 県	金子 由美子	大阪 府	池内 節子	徳島 県	坂東 恵子
岩手 県	菅原 清美	東京都	鹿野 哲	新潟 県	金子 由美子	大阪 府	池内 節子	徳島 県	坂東 恵子



さわやかパートナー法人(14件)

(50音順)

任意団体伊勢まごころ

株式会社公文教育研究会

株式会社ザイマックス

NPO法人さわやかたすけあい草加

公益財団法人住友生命健康財団

NPO法人たすけあいあさひ

NPO法人たすけあいほっとライフ小川

NPO法人食べて語ろう会

有限会社ディーアンドイー

日本郵政グループ労働組合

株式会社八洋

NPO法人福祉バンク大館

三菱重工工業株式会社

山崎製パン株式会社

一般ご寄付(4件)

(50音順)

中根 敏雄 (3千円)

株式会社八洋 (50万円)

ボランティア・ペンダー協会 (40万501円)

米田 俊子 (2万円)

『さあ、言おう』バックナンバーのご紹介

◎お問い合わせは広報まで 電話：(03) 5470-7751 メール：pr@sawayakazaidan.or.jp



2021年7月号

- 巻頭言「子どもの共感力を地域で育もう」 清水 肇子
- 厨房男子 原澤 益太郎さん
- さわやか福祉財団の軌跡
<寄稿4> 思いを持った生活者の視点で住民の心を動かす 鶴山 芳子
- 活動の現場から NPO法人ほっとあい(宮城県大河原町)
- 移住 悪くないですよ 寺田 幸代さん(岐阜県美濃市)
- 連載6 老いの暮らしを創る 村田 幸子 ほか



2021年6月号

- 巻頭言「70歳定年で社会は変わるか？」 清水 肇子
- 今風女子 北風 宗照さん
- さわやか福祉財団の軌跡
<寄稿3> 異彩・異才の個性派ぞろい 鶴山 芳子
- 活動の現場から 西武狭山グリーンヒルおたすけ隊(埼玉県入間市)
- 移住 悪くないですよ 新地 章倫さん(長野県佐久市)
- 連載5 老いの暮らしを創る 村田 幸子 ほか



2021年5月号

- 巻頭言「『思恩忌』春」 清水 肇子
- 厨房男子 中村 安宏さん
- さわやか福祉財団の軌跡
<寄稿2> 清水さんのこと 丹 直秀
- 移住 悪くないですよ 阿部 幹司さん・幸子さん(宮城県栗原市)
- 連載4 老いの暮らしを創る 村田 幸子 ほか

NEWS

& にゅーす



令和2年度（2020年度）

決算が承認されました。

2020年度決算速報

期末指定正味財産

32億2910万3120円

期末一般正味財産

8億4315万4247円

6月4日に理事会、21日に評議員会を東京都港区のメルパルク東京にて開催しました。主な議案は、令和2年度事業報告並びに決算の承認です。昨年

同様、新型コロナウイルス感染症対策として、一部の評議員、理事、監事はウェブ会議システムを利用して出席しました。

理事会、評議員会ともに、まず堀田力会長が、当財団全般について説明しました。評議員会では、「地域助け合い基金」により、全国でさまざまな活動をしている数多くの法人格を持たないような小さな団体を支援できたことや、コロナ禍の中でも工夫をすればできることがあることを動画で配信し、活動の継続、発展を後押ししたこと、地域共生社会に向けた社会の流れと当財団の理念、取り組みの考え方に、「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」の準備や参加申し込みの状況、住民主体による地域共生社会づくりの働きかけに着手していることおよびその進捗状況についての4点の説明がありました。

続いて清水肇子理事長が、令和2年

度の事業報告と決算について説明しました。まず、事業の報告について、令和2年度はコロナ禍の中ではありましたが、全国の助け合い活動推進の動きが途切れないよう、また、各地の地域共生の動きの支援に向けて、工夫を凝らしながら意欲的に取り組んできたこと、具体的には、動画の作成や都道府県に対してオンラインも活用しながら情報交換会の開催などの支援を行ったこと、「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」の準備に精力的に取り組んだこと等が報告されました。また、ふれあい推進事業に加えて、当財団の公益目的事業である社会参加推進事業、情報・調査事業についても、それぞれの主要な活動について報告がありました。決算については、その内容について詳細な説明がありました。また、新たに頂戴した故安田寿栄子様、故和田和子様、故澤谷静枝様、故設楽千恵子様からの遺贈によるご寄付の内容や、

新たに1件の遺贈のお申し出がある。この説明、さらに、3月23日に執り行った「思恩忌春」についての説明がありました。大変貴重なご資産を当財団の理念と活動に共感していただき、遺

贈という形で残してくださった皆様に、厚く御礼申し上げます。

理事会、評議員会ともに、ご出席の皆様から多くの貴重なご意見をいただき、活発な質疑応答の後、理事会、評

議員会とも全会一致で原案通り承認されました。

なお、事業報告並びに決算報告は、本誌付録および当財団のホームページでもご覧いただけます。(内田 信幸)

さわやか活動日記(抄)

〈2021年6月1日〜6月30日〉

社会参加推進事業

社会人地域参加
推進プロジェクト

高連協 2020年度

役員会並びに総会開催

〔6月24日〕

高齢社会NGO連携
協議会の役員会を、当
財団会議室にてウェブ

より、総会を開催した。

全24会員団体中9団体

参加、15団体の委任状

提出を受けて総会は成

立。両共同代表の下、

一般財団法人長寿社会

開発センター大上真一

氏を議長として、①20

年度事業報告の件、②

20年度決算承認の件、

の2議決案が全員一致

で承認された。また、

今年度各事業推進に向

けて各団体から活発な

発言もあり、事務局と

しても引き続きしっか

り対応していきたい。

(玉置)

退職のお知らせ(6月13日付)

■事務局 岩浅 眺美さん

在職中にお寄せいただきました皆様のご支援に感謝いたします。

事務所 だより

●最近、財団内では新型コロナウイルスのワクチン接種が話題となっている。今のところ、重篤な副反応が出たスタッフはいないので、ちょっと安心? ただし、ワクチン接種が万全とは言えないので、あらためて気を引き締めて、コロナ対策をしっかりと取り、神奈川サミットの準備を進めていこうとみんなで奮闘中。

みんなの広場



投稿募集

『さあ、言おう』は、皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ、ご意見をお寄せください。

本誌で取り上げたテーマへのご意見・ご感想、人生100年時代の生き方、ボランティア活動等のエピソードなどをお待ちしています！

*添付の投稿ハガキや投稿用箋などをどうぞ活用ください。

*掲載にあたっては、誌面の都合により編集要約させていただきます。あらかじめご了承ください。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階

公益財団法人さわやか福祉財団

『さあ、言おう』編集部宛

FAX (03) 5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

6月号「真っ直ぐに、30年」を読みました。
「鶴山さん、多くの先人のご努力があつて今の財団があるのでですね！熱い想いを諸活動にぶつけられた方々を尊敬申し上げます。」

熱い想い、
尊敬します

内田 友昭さん 75歳

神奈川県



本当に、残念です

それにしても、五十風様が早逝されたのは大変残念でしたな。



Tsutomu Hotta

あなたの気持ちを助け合いの力に活かしませんか？

「地域助け合い基金」で

コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

こんなふうに
役立っています！
皆様のご寄付



新潟県
佐渡市

コロナに負けず
助け合い活動スタート

助け合う地域
を目指し、外出支援、
部屋の掃除等の有償ボ
ランティア活動を開始
ボランティア活動保険
加入費用、消耗品費等を
助成



鳥取県
米子市

集いの場を
立ち上げ

使われなくなった老人憩い
の家を再活用し、住民が集
いの場を新たに立ち上げ
机・いす、体温計、コーヒーメーカー、
事務用品購入等を助成



京都府
京都市

活動を屋内から屋外へ

コロナ禍で認知症カフェから
農園プロジェクトへ。
多様な人たちの交流拠点に発展
畑の賃借料、苗・農具購入費等を助成

ご支援、ご寄付を
どうぞよろしくお願いします。

※詳細は、33ページをご参照ください。

財団ホームページ内
基金関連ページ



助け合い社会



公益財団法人

さわやか福祉財団

私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります(所得税の寄付控除額の上限は所得の40%-2000円)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の専用用紙をご用意していますので申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵

はり絵・池田げんえい



「蜩」

編集後記 ●ご遺贈くださった皆様、財団を支えてくださった皆様に感謝の思いを込め、「思恩忌 夏」を執り行いました(表紙裏)。
●「真っ直ぐに、30年」は、財団のために尽力された企業OBの皆さんを紹介しています(P4~)。●「今風女子」は滝野文恵さん。行動するパワーとその思いに迫りました(P14~)。●「活動の現場から」は、広大な一戸建て団地の住民たちが危機感を共有し、助け合い活動を創出した事例です(P20~)。●「いきがい・助け合いサミット」まで3週間となりました。開催内容は今後、本誌でも紹介していく予定です。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

大森
彌

身体のいたるところにガタがきた。

生者必滅の理。終活を急ごう。

これまで縁あって多くの人びとの知己を得た。

人は一人で生きていけないし生きられない、としみじみ思う。

生者共生の理。



●東京大学名誉教授

1940年東京生まれ。専門は行政学・地方自治論。介護保険制度の創設と運用にかかわる。近著に『老いを拓く社会システム』。現在、成年後見制度利用促進専門家会議委員長。

（さわやか） 8月号

通巻336号 2021年8月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

コロナ禍を乗り越えて、
地域共生社会実現に向け、一緒に前に進みましょう！

いきがい・助け合い サミット in 神奈川

共生社会をつくる地域包括ケア
～生活を支え合う仕組みと実践～

いよいよ開催です！

開催 2021年 **9月1日(水)・2日(木)**

場所 パシフィコ横浜
(横浜市西区みなとみらい1-1-1)

開催形式 会場参加 および
オンライン視聴

主な内容

- 全体シンポジウム
「幸せな人生と社会に不可欠ないきがいと助け合い」
- 分科会：第1部から第3部まで34分科会
- ポスターセッション
- 全体発表会 など



人生100年時代の
新しい
いきがい・助け合い社会を
みんなで考え、
発信します！



2019年「いきがい・助け合いサミット in 大阪」の様子